

サクソフォンの吹き方

ジャズ編

-中級-

基本力アップコース

こじまやサックス教室 講師

小嶋 哲也

ここからが本当の勝負!!

中級編を学習するに当って

!!!初級修了おめでとうございます!!!

思えば、基本的な吹き方から始まり、練習し、楽譜の見かた、意味を知り、練習し、スケールの意味を知り、練習し、耳を鍛え、練習してきたわけであります。

そうなんです。練習してきたからこそ、ここまで来れたのであります!!ん??ということは、

そうです。これから、練習あるのみ、なのです!!

なんだか、自分で書いていてもうんざりしますが、実際そうしてきたのですから、書かないわけにはいきません。。

もし、練習しなくても上手くなれるよ!という先生がいたら、どうぞそちらの教室に変わっていただいて結構です。レッスン代も上がることですね。

中級編ではまず、より高度な楽器のテクニックから学びます。

え ‘～っ?!これが終わったらフレーズ教えてくれるって言ったじゃん!!

はい。でも、これからは

「もっともったいい音で」

「タイミング良く」

練習していく必要があります。

それともうひとつ、スケールだって3度音階だって、立派なフレーズです!

要はそれをタイミングよくリズムに乗せ、切り替えていく。

言うならば「応用していく」感じです。

ここまでできれば、皆さんが苦手な「耳コピ」も、かなりラクにできるようになってきます。

あとは「カッコいいなあ～」と思うフレーズをチヨチヨイっと耳コピして、自分のフレーズに花を添えていく。そんな感じです。

なあんだ、結局フレーズ教えてくれないんぢゃん(○`ε´○)

大丈夫、ちゃんと教えますっば(´ー´)ノ

第一章 もっと楽器のテクニクを!!

§ 1. 喉のコントロール

まず「サックスのリードと、声楽における声帯は同じ目的のために働く」ということ。つまりサックスは歌うように吹かなければいけない。ということです。詳しく説明していきましょう。
サックスの演奏法という、どうしても口周辺のアンブシュア関連の事に気を取られやすいのですが、それと同等に大事な要因として、喉の使い方を挙げるすることができます。
音色を生かすも殺すも、喉の使い方ひとつです。ちょっとした気を使うだけであなたの音色をレベルアップすることが出来るのです。

== 音は声の延長線上にある? ==

皆さんの中にもカラオケ好きな方はたくさんいらっしゃると思いますが、唄を歌うときのことをまずイメージしてみましょう。高い声を出す時や低い声を出す時、体はどんな反応をするでしょうか？

高い声：あご（目線）が上がる

低い声：あご（目線）が下がる

こんな感じになっていませんか？無意識に唄を歌うと必ずこんなふうな体が反応してしまうと思います。しかし声を正しく響かす（発声する）ためには本当は頭部を動かしてはなりません。首が曲がると喉に圧力が加えられ、声自体も細い貧弱なものになってしまうのです。

サックスの演奏でも同じことがいえるのです。では音域の変化によって体のどこで音色をコントロールするのでしょうか？そうなのです、ここで喉の話に戻ってくるわけです。

== 基本的な喉のポジション ==

まず、最初に音作りの基本となる喉のポジションを探します。
指を押さえない、開放のC#でロングトーンしながら、「あいうえお」を順に言うつもりで喉の状態を変化させてみましょう。
びっくりするほど音色が変化するのが判ると思います。「あ」と「お」は良く響きがあるのですが、「い、う、え」の喉の状態ではややつまつたような音色になります。私は個人的には「あ」と「お」の間ぐらいの喉のポジションの音色が好きです。
皆さんも是非お試しください。基本的には喉を開いた（あくびのような）状態で、リラックスして吹けて、音が良く響く状態を探します。

== 音域による喉のポジション変化 ==

これは具体的に文章で表現するのは非常に困難です。変化するさまを、皆さんに実際に感じて頂かねばなりません。

2オクターブのC Major Scale（低音のドから高音のドまで）を吹きながら一定のボリュームで吹けるように注意して、喉の状態を観察してみてください。次に、スケールを声に出して“いい声で”歌ってみてください。どうです？喉の感じが音域によって微妙に変化していくのが楽器と歌ではそっくりだ！と感じた方が、正解です。

各音には、その音固有の喉のポジションが存在すると思ってください。口笛を吹くとき、音程によって喉をコントロールしますよね？いえ、なんです。この感じともそっくりですので、試してみてください。

サックスでメロディーを唄うためには、指を動かすだけでなく、本当に声で歌うような気持ちと喉の動きが伴わねばならないのです。逆に喉のポジションをしっかりと把握してしまえば、音色は充実し、音程もしっかりとしてくると言えます。

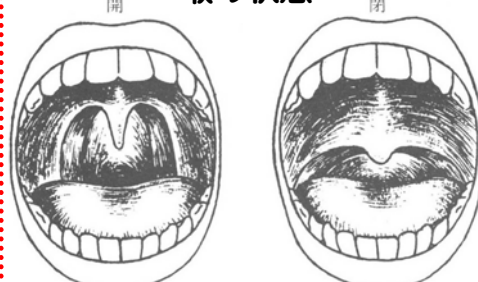
同じ音程を2つずつ交互にロングトーンする練習をすると、とても効果的な成果が得られます。

グリッサンドやベンドなどもアンブシュアの変化よりも、喉の変化によるところが多い感じです。

フラジオはいわゆる「裏声（ファルセット）」の発声と同じ喉の状態になると思うとより出やすくなります。

喉に関しては、イメージをお伝えすることしか出来ないのが残念です。でも、これらのことを頭のどこかで覚えておいて下さい。必ず、お役に立つことと思います。

喉の状態



リラックスしている
「アー」とささやく感じ

緊張している
言葉に詰まった感じ

実際には左右の中間ぐらい、つまり同じ「アー」の音をハッキリと声に出して言う感じで演奏します。

空気の流れとリードの振動

いい声で歌うとき、自分自身の声量のわりに息が出ないのをまず確認します。
サックスを吹くときも同じで、正しいアンブシュアと喉の状態によって吹き込まれようとする空気の流れは、リードを通過した後には息としては大変弱い力になりますが、音波としては非常に力強いエネルギーになります。これを証明するのが下の2つの写真で、ティッシュを2.5cm角に切り、ネックをさかさまに付け、音を出しながら浮かべると、



いくら吹いても浮かんだままです。最低音のBbを吹きながらベルの中に同じティッシュを入れてみると、ベルの中に均衡を保って浮かぶでしょう。それをベルの外へ吹き飛ばそうとしても、紙が一層しっかりと停止する結果を生ずるだけです。



§2. オーバートーン Over Tone

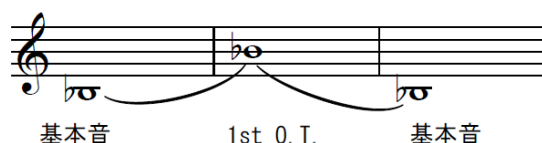
喉のポジション移動を体得するために有効な練習方法として
オーバートーン（倍音列・以下、O.T.）の練習をご紹介します。

金管楽器では、3～4本のピストンやヴァルブの組合わせと倍音列を使って音程を作っているわけですが、サクソなどの木管楽器ではそれぞれの音に固有のフィンガリングが存在するために、普段倍音を意識することはあまりないと思いますが、実はこれが奏法上の重要な要素なのです。

== 基本練習 ==

まず最初に練習することは、サクソの最低音であるBbの音から運指はそのまま変化させずに1オクターブ上のBbを出す練習です。

実際に吹く前に声を出してハミングで歌ってみて、喉の変化を観察してみましょう。オクターブ上に上がる時には喉が開く（喉ぼとけが前に出る）のが分かりますか？分かりにくければ人差し指を喉ぼとけの上に置いてみて下さい。感じがつかめたら楽器で音を出して試してみましょう。



この時に注意することは、アンブシュアの圧力を変えないことです。口を締めたり、歯で噛んで出すものではありません。あくまでも喉の変化でオクターブ上の音へ移動しましょう。

最初は上手いかなと思いますが、コツがつかめるまでじっくり練習してください。ハミングと発音を繰り返しながら、喉のポジション変化に集中して下さい。

息のスピードも若干速くしてやる必要もありますが、馴れてくると本当に喉の変化だけで移動出来るようになります。

== 本来の運指の音と比較する ==

基本練習が上手く出来るようになったら、次はO.T.と本来の運指で得られる音とを比較していきます。基本音やO.T.は、楽器のトーンホールを全部ふさいだ状態ですから、当然振動している管の長さが長く、豊かな響きが得られる訳です。本来の運指の音はそれに比べると管の長さも短く、響きも貧弱に聞こえます。

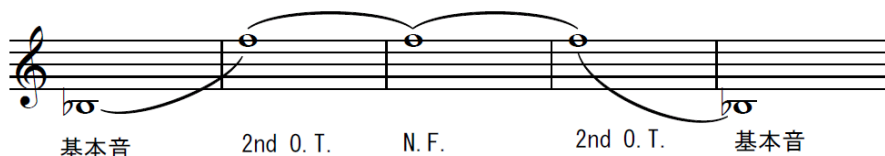
この差をなるべくなくして補正してやるのがこのトレーニングの最大のねらいです。オーバートーンの喉の状態を保ち、本来の運指で得られる音を太く、豊かに響かせO.T.に近づけていきましょう。（N.F.はNormal Fingeringの略です）



上の譜例のように基本音～O.T.～本来の運指で得られる音～O.T.～基本音というサイクルで練習していきます。ブレスが足りなくなった時には中断し、その個所から続行して下さい。最終的にはワンブレスで早く移行出来るようにしていきます。

== 音域の拡大 ==

第1倍音（1st O.T.）が上手くコントロール出来るようになったら、順次第2、第3と音域を拡大していきます。第2倍音は次のようになります。



倍音列は以下ようになります。



ポイント

1. 喉を「ee-ee（イー イー）」と発音するようにすると音がやや出やすくなります。
2. 左図の3rd～6th辺りが、倍音の音域の為のアンブシュアの「感じ」を得るために特に大切です。下にある練習曲でみっちりやって下さい。
3. 倍音は、それが実際になる“以前に”聴かなければならないので、頭の中にしっかり和音を意識しながら練習することが大切です。
4. クドイようですが、決して下唇をぎゅ〜っと噛んだりしてはいけません。

高音になるほど喉のポジション移動は微妙になっていきます。アンブシュアの力は変化しませんが、喉のポジションが変わることによって下の歯も少しづつパーカッシブ・ポジション寄り（前へ）に移動していきます。

== 基本音を変える ==

Bbの基本音が第3倍音くらいまで出るようになったら、同じように低音のBやCを基本音としたオーバートーンにもチャレンジしてみましょう（上図参照）。
馴れてくると左手小指のテーブルキーの移動だけで（金管楽器のように）ほとんどのメロディーが吹けるようになる筈です。（決して音楽的ではないとは思いますが・・・）テナー奏者の故マイケル・ブレッカーなどはよくこのようなトリッキーな演奏をアクセントとして自分のソロの中に取り入れていました。

この練習は非常に地道な積み重ねの練習です。根気強く継続することが一番大切です。

私自身も最初は全然出来ずに諦めかけていたのですが、ある日突然、急に出来るようになりました。

オーバートーンをしっかりとマスターし、喉のポジションが把握出来ると、高音域でも音がやせることなく全音域に均等な音色感になりフラジオも安定して出るようになります。

柔軟な喉の変化を覚えて、ワンランク上の音色を身につけましょう。

まるでオーバートーンの練習のために書かれたような曲

※（フィンガリングは全体を通してLow Bb+オクターブキーのままで）



§ 3. ハーフタンギング

CDを聴いているとサックスの音の立ちあがり「ニュフーツ」という感じに聞こえたり、音が聞こえるような聞こえないような微妙な音があるのに気づかれたことはありませんか？
そういった微妙なニュアンスを出す時に使うと効果があるのが、この「ハーフ・タンギング」です。

==リードに舌をあてたまま音を出す==

ハーフ・タンギングの考え方の基本は、舌でリードの振動をミュートすることになります。決して音を止めるためのタンギングではなく、音色変化を生むためのタンギングのバリエーションとして捉えてください。リードに舌が触れているのに音が鳴っている状態を作ってやるわけです。ハーフ・タンギングのためのイメージ・シラブルは「ズ」「ス」「ツ」「ッ」です。□で発音してみましょう。いずれも上の歯の裏側に舌があたったまま発音している事が分かりますね？

では、今度は実際にマウスピースを咥えて練習してみましょう。

最初は音を出さずに息だけを軽く吹きこみながらゆっくりと「タズアズアズアズ」という舌の動きだけを練習してみます。「タ」は音の出だしのノーマル・タンギング、「ア」は舌がリードから離れている状態を表します。上手く出来ましたか？また「ズ」の発音の際に息が止まってしまうはいけません。また、口が「ズ」だからと行って、喉が閉まってもいけません。もちろん、息はずっとマウスピースの中に流れていなくてはなりません。

次に、音を出しながら同じ事をやってみましょう。まず小さ目の音で吹いてみます。音は、開放のC#でいきましょうか！
どうですか？「ズ」のところで音が消えてしまいますよね。でもそれで良いのです。

さあ、次のステップに進みましょう！！

今度はちょっと大きめの音でお腹に力をいれて（腹圧をかけて）やってみます。

どうでしょう？「ズ」のところで音が上手くミュートがかかり、こもった音が鳴っている人は正解です。まだ音が消えてしまう人はもう少し舌の先の方をリードに軽くつけるつもりでもう一度試してみてください。

腹圧が充分にかかっていないと、良い状態で舌があたっていても音が消えてしまいます。お腹を意識して、たくさんの息をマウスピースの中に入れてやるつもりで練習して下さい。

どうですか？最初は舌がムズ痒く感じるかもしれませんがすぐになれると思います。

では、先ほどの「タズアズアズアズ」を使って6メジャー・スケールを吹いてみましょう。

音	ソ	ラ	シ	ド	レ	ミ	ファ	#	ソ
シラブル	タ	ズ	ア	ズ	ア	ズ	ア		ズ

もうお気づきの方もいらっしゃるかもしれませんね！これがジャズ・アーティキュレーションの基本タンギングになるわけです。しかし、これはかなり練習しないと実際の曲やアドリブの中で応用できません。頑張って地道に練習を続けてくださいね。

また、ビッグ・バンドなどで良く言われる「のむ音（ゴースト・ノート）」もこのハーフ・タンギングを用いて演奏します。

この応用で、単音で使うと冒頭に書いたようにデビッド・サンボーンなどが多用する「ニュフーツ」とか「ンナ～」といったニュアンスを出すことも出来ます。是非試してみてください。

ハーフ・タンギングが無意識にクセになってしまっている人も良く見かけます。音の出だしが全部「ンナ～」になってしまう人ですね。これは感心しません。音程感もなくなってしまうし、演奏にメリハリがなくなってしまう。注意してください。意識して使い分けれることがテクニックであるわけです。

皆さんも正しいハーフ・タンギングを身に付けて、より良いジャズの演奏表現手法を身につけましょう！！

§ 4. 特殊な奏法

ポピュラーやジャズでは多彩な音色を使い分けることが良くあります。グロートーン（エレクトリックギターのディストーションサウンドのような歪ませた音）やサブトーン（かすれたような音）パーカッシブトーン（アタックの強い破裂音のような音）など、いずれも特殊奏法の部類に入ります。順番に説明していきましょう。

I .サブトーン Sub Tone

==サブトーンってどんな音？==

「ズズズズ～～」というようなちょっとかすれた、息の音が混じったムーディーなサックスの音を聴くことが良くあると思います。ソニー・ロリンズやスタン・ゲッツ、スコット・ハミルトンなどテナー奏者が良く使っています。ちょっと古いところではサム・テイラー、シル・オースティンなどという「魅惑のテナー・サックス」という言葉が使われたムードミュージックもこのサブトーンが聴ける格好の教材です。

別にテナーに限った奏法ではなく、アルトやソプラノでもMALTAやKenny-Gなどいろんなプレイヤーが低音のメロディーをソフトに響かせたい時にこのサブトーンを頻繁に使っています。

ビッグバンドなど、サックス・セクションのアンサンブルで演奏する場合はこのサブトーンのテクニックは必修です。曲中の静かな部分でユニゾンでメロディーやカウンターラインを演奏するような場面では、必ずと言って良いほど楽譜にサブトーンで（sub tone）という指定があります。

余談ですが、楽譜上でsub.と書かれている場合もあるのですが、スビット（急に）という表情記号と間違ってしまうことが良くあります。sub.Pなどと強弱記号の前に書かれている場合はスビット・ピアノ（急に小さく）と解釈して下さい。サブトーンの指定ではありません。

==サブトーンの吹き方==

①ノーマルなアンブシュアーの状態から下の歯（あご）を軽く手前に引くと、下唇とリードとの接する面積が広がります。（この時下の歯の上にはほとんど唇はかぶっていません）下唇をひっくり返してリードの振動部分をミュートして先端だけを振動させてやるわけです。

②この状態でゆっくりした息（寒い時に手を温めるときのハア～という感じ）で吹くとサブトーンが鳴ります。注意するのはアンブシュアーを緩めて吹くのではないということです。かすれた音が出始めたら息のスピードを早め、よく響かせるようにします。音程が下がってしまっていないかどうか、耳でよく確認しながら吹いてみましょう。

③最初は低いソ（G）の音くらいから練習すると良いでしょう。良く響くサブトーンが出るようになったら、徐々に半音ごとにスラーで（タンギングせずに）下がって最低音までいきましょう。低音でスムーズにできるようになったら、今度は高音へ向かって音域を拡大していきます。

サブトーンを使うとソフトな表情をつけることが出来ます。しかし楽器の奏法の基本はあくまでもノーマルトーンです。絶えず平行して練習しましょう。

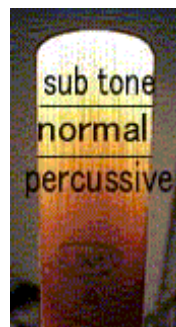
低音を小さな音で吹こうとすると無意識にサブトーンになってしまう人もよくいますが、これでは失格です。あくまでもコントロールできることが絶対条件です。

サブトーンは楽器自体も良く振動するため、音叉の悪い楽器を響かす時にも有効です。最低音のあたりをサブトーンを使ってロングトーンしてやると、楽器全体が振動するようになり、いわゆる良く鳴る楽器へと状態が変化していきます。

II .パーカッシブトーン Percussive Tone

==パーカッシブ・トーンってどんな音？==

「バキッ」というような低音や、極端なsfz（スフォルツァンド）などで聞く事ができる、音の立ち上がりが良い硬い音、これがパーカッシブ・トーンのイメージです。パーカッシブという名前の通り、歯切れ良く、リズムックでタイトなフレーズを演奏する時に使用されます。ちょっと古いですが、ベレス・ブラード楽団の「マンボNo.5」のサックスセクションのリフを思い浮かべて下さい。まさしくあの感じなのです。



リードの振動する部分のイメージ

==パーカッシブ・トーンの奏法==

奏法的な考え方としては、サブトーンの対極にあると思ってください。

1. ノーマルなアンブシュアの状態から下の歯(顎)を軽く前(1~2mm)に突き出すようにします。リードの振動する面積を広くしてやるわけですね(前頁の図参照)。この時注意する事は、決してアンブシュアの圧力を変えてはいけない、という事です。サブトーンの時にも書きましたが、変化するのは下の歯(あご)の前後の位置だけです。アンブシュアはどんな奏法をしているときでも常に一定であるべきです。
 2. この状態で、通常より速いスピードの息(ろうそく10本を一息で吹き消すくらい?)を吹きこんでやります。
 3. これで吹いてみて音が割れたり、ピエ〜ツというような開いた音になってしまう場合は下の歯が前に出過ぎています。ボリュームがきちんとコントロールできるくらいの位置を探して調節し直してください。
- どうでしょう?タイトなパーカッシブ・トーンが出ましたか?スタカートと組み合わせると面白い表現ができると思いますよ。

多くのアドリブ・プレイヤーは低音から上昇するフレーズの時、このパーカッシブ・トーンから入って高音に移るにしたがって、レガートなフレーズに変化するという傾向が良く見られます。フィル・ウッズやマイケル・ブレッカーなどがその顕著な例という事ができます。

クラシック・サクスの場合、サブトーンやパーカッシブ・トーンのような極端な音色の変化をつける奏法というのは存在しないと考えた方が良いでしょう。あくまでもノーマルトーンの範疇での音色の陰陽をつけると考えて下さい。

III .グロートーン Growl Tone

以前、チェッカーズというバンドが大人気になりました。覚えている方も多いでしょう。またオールディーズ・ポップスの「ダイアナ」などを思い出して下さい(古すぎるかな?)。これらの曲中で聴く事の出来る、音が割れているようなサクスの音こそがグロートーンです。ロックやブルース、日本の演歌などでも良く使われますが、張りのある、迫力ある音色です。特にテナー奏者が使うことが多いですが、ほかの楽器でも音の歪ませ方の方法は一緒です。

==グローしてみよう! ==

方法は簡単です。音を出す時に喉の奥で「う〜」と実際の声を出し軽く(うなり)ながら、楽器を吹くと音が歪みます。ちょうど、ハミングしながら楽器を吹くような感じですね。大きな声を出す必要はありません。鼻歌を歌うようなつもりで気軽にチャレンジしてみてください。声を出すことによって声帯が振動し、楽器の音と声(声帯の振動)がミックスされ音が歪むことになるわけです。いくつか注意するポイントがありますので箇条書きにします。

1. 最初は高音域の音の方がかかりやすいので、オクターブ・キーを押さえたA(ラ)かB(シ)くらいから練習すると良いでしょう。
 2. はじめは大きな音で吹こうとしない方が良くかかります。ピアノくらいの小さ目の音でロングトーンしながら、まずは声を出すコツを掴みましょう。
 3. とかく声を出そうとすると力が入って喉を締め付け苦しくなってしまうので、リラックスして大きく喉を開くようにイメージしましょう。唇を閉じたまま「あくび」をするような感じです。
 4. 慣れないうちは、喉がむずむずして気持ち悪いですが、その場合はまだ喉に力が入りすぎているのだと思って間違いありません。すぐ慣れてそのうち自在に使い分けることが出来るようになります。
 5. 声を出すことに集中すると、どうしてもアンブシュアはゆるみがちになってしまいます。絶えずノーマル・トーンとピッチを比較して練習して下さい。
- 是非マスターして、ここぞという盛り上がるフレーズのところでカッコ良く使うと効果抜群です。うなりながら楽器を吹くことが最初は難しく感じるかもしれませんが、最初からうなろうとせずに、まず普通に音を出してロングトーンして、後からうなると上手くかかると多い感じがします。曲のイメージに合わせて使ってみると良いと思います。アップテンポの8ビートやロックンロール、唄い上げるようなバラードのサビなどでグローをかけると効果的です。ジャズでも特にハード・バップ系のプレイヤーは使う人が多いです。しかし、なにが何でも盛り上がればグローというのも考えものです。グローを使うにはふさわしい曲想というものがありますので、くれぐれも、愚弄トーン、にならない様、使い方には充分注意して下さいね。



Sonny Rollins



Stan Getz



Stanley Turrentine

特殊な奏法には他に

「ダブルタンギング」「重音」「スラップタンギング」「レロレロタンギング」「フラジオ」「ベンド奏法」等あります。フラジオに関しては前述しましたが、他のものについては直接お尋ね下さい。

第二章 ジャズと慣用句

§ 1. ペンタトニック・スケール CD Major & minor 2枚セット

==ペンタトニックについて==

呂音階、陽音階、ヨナ抜き音階、黒鍵ミュージックなどと称されております。要は、各メジャースケールの4番目と7番目が抜けたスケール、ということです。で、メジャースケールの1番目から始まるのがメジャーペンタ、6番目から始まるのをマイナーペンタとしています。

下の2つの表をよく見ていただくと、例えば、CとAmでは、始まり音が違うだけで、全く同じ音列、ということがわかんと思います。因みに、2番目から吹くと何となく「君が代」っぽい感じですし、5番目からだと、アジアンっぽいサウンドになります。

このように、ペンタトニックの世界では、メジャーもマイナーもあまり関係が無く、なお且つ、非常に安定した音列なので、世界中のあらゆる音楽シーンに活用されています。

試みに、下図のF#の音列を鍵盤で弾いてみてください。黒いところばかり、ですよ。

そうなんです。黒鍵は、ペンタトニックの音列なのです!今度は、黒鍵を5個同時に弾いてみてください。どうです?すごくいい感じの和音ですよ。ではついでに、白いところを弾かないように、黒いところだけでむちゃくちゃ弾いてみてください。どうです?どんなにむちゃくちゃ弾いても、なんだかいい感じのサウンドになりませんか??

キーさえ間違えなければ、安定的な音列なので、アドリブソロもより明快な感じになります!

まずは、下の譜面を参照して、伴奏に乗せて、ペンタトニックの練習をしましょう。

1.2.3.5.6番、どの音からもスタートできるように、そして、Low Bb~High F#まで、まんべんなく音を散りばめられるように練習すると、より効果的です。

吹いていて気持ちがよくなるまで、何べんもやってみよう!!

メジャー・ペンタトニック・スケール

C (CD1-C) (CD1-F) (CD1-Bb) F (CD1-F) (CD1-Bb) (CD1-Eb) Bb (CD1-Bb) (CD1-Eb) (CD1-Ab) Eb (CD1-Eb) (CD1-Ab) (CD1-Db)

Ab (CD1-Ab) (CD1-Db) (CD1-F#) Db (CD1-Db) (CD1-F#) (CD1-B) F# (CD1-F#) (CD1-B) (CD1-E) B (CD1-B) (CD1-E) (CD1-A)

E (CD1-E) (CD1-A) (CD1-D) A (CD1-A) (CD1-D) (CD1-G) D (CD1-D) (CD1-G) (CD1-C) G (CD1-G) (CD1-C) (CD1-F)

マイナー・ペンタトニック・スケール

Cm (CD2-Cm) (CD2-Fm) (CD1-C) Fm (CD2-Fm) (CD2-Bbm) (CD1-F) Bbm (CD2-Bbm) (CD2-D#m) (CD1-Bb) D#m (CD2-D#m) (CD2-G#m) (CD1-Eb)

G#m (CD2-G#m) (CD2-C#m) (CD1-Ab) C#m (CD2-C#m) (CD2-F#m) (CD1-Db) F#m (CD2-F#m) (CD2-Bm) (CD1-F#) Bm (CD2-Bm) (CD2-Em) (CD1-B)

Em (CD2-Em) (CD2-Am) (CD1-E) Am (CD2-Am) (CD2-Dm) (CD1-A) Dm (CD2-Dm) (CD2-Gm) (CD1-D) Gm (CD2-Gm) (CD2-Cm) (CD1-G)

§2. ブルース(ブルーノート)・スケール CD Major & minor 2枚セット

==ブルース・スケールについて==

まずは下の楽譜をごらん下さい。よく見ると、前頁の、マイナー・ペントニックの4番目に、何やら怪しげな音が増えているだけ、ということがわかると思います。

この音は、マイナー・ペントのルートに対し、トライトーン(ジャズ編初級P5参照)に当たり、Cycle of 5thの表で、ちょうどルートの反対側にあることから俗に、裏音(うらおと)とも呼ばれています。ペントニックの素朴な音列にたったの1音増えただけのこの音列が、世界中のあらゆる音楽シーンに多大な影響を与え、今もなお、さまざまな名曲と名演奏家を生み出しております。その詳細については、ブルースについて書かれた本などを参考にいただき、ここでは羅列しませんが、とりあえず覚えておきたい音列、ということです。

ペントニックと同様に、伴奏に乗せてひたすらに練習しましょう！

ブルース(ブルーノート)・スケール

C (CD1-C) (CD2-Cm) (CD1-Eb)	F (CD1-F) (CD2-Fm) (CD1-Ab)	B $\flat$ (CD1-B $\flat$) (CD2-Bbm) (CD1-Db)	E $\flat$ (CD1-E $\flat$) (CD2-D $\sharp$ m) (CD1-F $\sharp$)
G $\sharp$ (CD1-Ab) (CD2-G $\sharp$ m) (CD1-B)	C $\sharp$ (CD1-Db) (CD2-C $\sharp$ m) (CD1-E)	F $\sharp$ (CD1-F $\sharp$) (CD2-F $\sharp$ m) (CD1-A)	B (CD1-B) (CD2-Bm) (CD1-D)
E (CD1-E) (CD2-Em) (CD1-G)	A (CD1-A) (CD2-Am) (CD1-C)	D (CD1-D) (CD2-Dm) (CD1-F)	G (CD1-G) (CD2-Gm) (CD1-B $\flat$)

曲の中のブルーノート

チャーリー・パーカー大先生の名曲の中から、ブルーノートスケールをモロに使った部分を抜粋してみました。

Confirmationより

D7 G7

D Blue Note scale

Anthropologyより

G7 C7

G Blue Note scale

Au Privaveより

D7 G7

D Blue Note scale

Parker's Moodより

C7

G Blue Note scale

この4つの譜例から見てとれるのは、元のキーに対しIV7の部分での使い道が効果的、ということです。わかりますか??

問題: 上記譜例の中で、1音だけブルーノートスケールではない音があります。どれでしょう?

第三章 Any Key Advance ～すべてのキーを自在に～

§ 1. 半音上・下降 1 Bar Change CD Any Key Advance トラック2

さて、いよいよもって「練習あるのみ」モードに突入です！

えゝ ～今までののはなんだったのおお～～？？！

今までののは、これから行うことに対する準備でした。
これからは、今までのこともやりつつ、新しいこともやっていかなければいけません。

えゝ ～そんな時間ないよお～

ごもつともです。でも、解決法があります！
今までの内容は、よりスピードアップしてこなせる様に努力するんです。また、苦手項目中心で、日々抜粋メニューを作ってから練習するようにすればさほど時間はかかりません。
今までやったことは十分ウォーミングアップに役立ちます。また、早く吹ければ吹けるほど基本力も、上がります！

さて本題に入りましょう。まずは、別表2をご覧ください。スケールがずるずる書いてあります。メジャースケールで上がって、半音上のメジャースケールで下がり、また半音上がって... という練習ですが、伴奏をよく聴くと、4拍目の裏で次のコードにチェンジしています。21小節目までは、各小節の最後の「ド(Ⅰ)」の音が次の小節の「シ(VII)」の音、つまりメジャーセブン(M7)の音と意識して練習する、という事です。絶対に小節線のところで息継ぎをしてはいけません。その半拍前にブレスをとるのがベターです。22小節目からは、7(セブン)で下がってきます。やはり最後の音を意識して下がっていくのですが、次のルートの半音上の音。
ん？わからん。という方が多いと思います。この音は、b9(フラットナイン)といって、ジャズでは一般的なテンションノートです。
前ページのパーカー氏の譜例の中で、ブルーノートはIV7が効果的、というのを書きましたが、たとえばG7のところだと、Abの音が出てきているのが確認できると思います。これは、ちょうどDのブルーススケールのトライトーンがG7のb9に相当する、ということですね。だから相性抜群なんです。難しいですが、慣れてくると心地よくなってきます！

続いて別表3にいきましょう。
最初に、どの練習もやはり、上りはM7、下りはb9を意識してやる、ということをおきます。

②、③は3和音の練習です。楽勝ですね！

④はペントニック

⑤はペントニック+m3(マイナーサード)。ⅡとⅢの間の音ですね。
これ、明るく響きますけど実は、ブルーノートスケールなんですよ！

⑥は、3和音の応用。V-Ⅲ-Ⅳ-V-Ⅲ-Ⅰ。ノリノリでやってください！

⑦、前半はⅠ-Ⅱ-Ⅲb-Ⅲ-Ⅲb-Ⅱ-Ⅰ、後半はⅠから下へ半半半と下がって半半半と上がる形。
ちょっと難しいけど、カッコいいっすよ！

どの練習も、最終的には、別表1だけを見ながら吹けるようにならなければいけない、というキツイ一言を付け加えておきます。

§ 2. 半音上・下降 2 Bars Change CD Any Key Advance トラック3

別表4に譜例、別表5～14に練習例を記載。それぞれに解説を記してあります。

やり方は、1 Bar Changeと変わりません。
10例用意しましたので、やり応え十分！更なる基本力アップを目指しましょう！

くどいようですが、どの練習も、別表4だけを見ながら吹けるようにしましょう！

§ 3.4度進行 1 Bar Change CD Any Key Advance トラック4

別表15～22参照

半音進行と同様、ジャズ、ポピュラー、ロックを語るのに欠かせないのがこの、4度進行です。この先登場するⅠ-Ⅳ/Ⅱ-V-Ⅰ/Ⅲ-VI-Ⅱ-Vなどの進行はいわば、現代でもコード進行の王道であり、これらはすべて4度進行です。

この4度の流れを掌中にしてしまえば、後の練習がすごく楽になります。単純ですが、奥深い練習です。しっかり循環して、指の動きがサラサラになるまでやりましょう!! もちろん、それぞれ譜面を見ずに演奏できるようになって初めて合格、という事をお忘れなく!!

仕上げは、それぞれの譜例を倍速にし、トラック5の Cycle of 5th Half Bar Changeで行います。中級の段階ではまだできなくても大丈夫です。

§ 4. 指癖をつけましょう

別表23～34参照

早く動くとすごく便利な120のフレーズをまとめてみました。1～12までの番号が振ってありますが、ページ順に練習していく必要はまったくありません。たとえば1段目はどのページもメジャースケールの音列ですが、まずはこの段だけ12ページ分、みたいに練習してもまったくかまいません。それに、1ページ目はCでまとめてありますが、やってみると、キーは低いし指はややこしい。この12ページの中でもかなり難易度の高い内容になっています。ですので、1オクターブ上げて練習するか、他のページから当たってみるかしてください。要は最終的に全部吹ければいいんです。どうしても順番に片付けなイカン人は、ご自由にどうぞ。

あと、各フレーズの上になんちゃらかんちゃら書いてありますが、これはあくまで、ジャズ語の「話」をするときに必要なだけであって、おそらくやってみると、「インドっぽい」「アジアっぽい」などの印象を持つと思いますので、それで覚えてしまってください。フリジアン♭4はこういう音列で、などと覚える必要はまったくありません。が、前述に無いものだけここでさらっと解説します。

◎PHRYGIAN ♭4=ミ.ファ.ソ.♭ラ.シ.ド.レ.ミ
◎LOCRIAN #2=シ.♯ド.レ.ミ.ファ.ソ.ラ.シ

フリジアン・ロクリアンについてはダイアトニックのところで説明したとおりですが、各スケールの2番目、4番目を書いてあるとおりに変化したものです。

◎H.m.P.5B (ハーモニックマイナーパーフェクトフィフスビロー)

ハーモニックマイナー=AEOLIAN #7=ラ.シ.ド.レ.ミ.ファ.♯ソ.ラ
これを完璧に5番目から置き換えて、ミ.ファ.♯ソ.ラ.シ.ド.レ.ミとなったやつのことです。
ややこしい名前付けるな～～!

◎ALTERED (オルタード) = Melodic minor Perfect 7th Below (こんな表記は無い)

メロディックマイナー=Harmonic minor #6 (こんな表記も無い) =ラ.シ.ド.レ.ミ.♯ファ.♯ソ.ラ
したがって、オルタード=♯ソ.ラ.シ.ド.レ.ミ.♯ファ.♯ソ

とってもややこしい説明ですが、頑張っってわかってください! 後々このテンションだらけのスケールの威力を目の当たりにすると思います。

要は吹ければいいんです。吹ければ。

※とりあえず中級レベルでは、すべてのフレーズをテンポ100で演奏できれば合格です。
ちなみに、160で全部完璧に動けば、プロ級です。頑張っって!!

§ 5. 指慣らし Major and minor CD Any Key Advance トラック6&7

別表35～36参照

さあ、基本力アップの仕上げは必殺指慣らし、です。
この練習は、今までに適当なアドリブなどによってトリツイタ悪魔のようなマンネリ癖をキレイに
浄化し、更なる上昇ステップへと導いてくれることでしょう!!
2、3オクターブ練習できるキーは、3回リピートしている間にどんどんチャレンジしましょう!
譜面を見ずに演奏できるようになったら完璧です!

仕上げは、CDトラック8&9のFastバージョンで!

演奏方法は、各段の1～4小節目を1回ずつリピートしながら下へ進んでいき、
下まで行ったら終わりです。こちらはまだできなくてもかまいません。が、頑張ってみましょう!!

あとがき

これでめでたく、中級の基本力は完璧に身につきました!!が、

基本力完璧≠アドリブがうまい、なのであります。

え`~~~~っ!!こ、ここまで必死にやっでぎだの`に` いい~~~~っ!!!

今はまだ、慣用句の一部を学習したに過ぎません。中学校の英語に例えるなら、私立有名高校に
合格できる程度の実力が付いた、といったところでしょう。
そうなんです。いくら言葉を覚えても、使い方がわからなかったら、せっかくアメリカ人と知り合
いになっても、横でニコニコしているだけになってしまうんです。
大切なのは「使ってみること」です。ええい、ままよ、と言葉を放つことによってのみ、相手は
苦笑いを浮かべたり、喜んでくれたり、と反応するわけで、何も言い出せなければ相手も困って
しまいます。
初級の本にも書きましたが（ジャズ編 初級P.11参照）実践あるのみ、なのです!
今までどおり、ただがむしゃらに吹いていれば、近い将来必ずこの本で学んだフレーズの本質が
多分に活用できる日が来ます!

今後は、ジャズが生んだ数々の名曲、名コード進行、名フレーズを更に提供していくと共に、
ソロ譜作成、移調など、より実践的な授業内容を展開します。その名もずばり、実践コース。

やっとかやらずらしくなってくるのね～～

でも、厳しくなるわよ～

え`～やだ～

ぢゃ、やめる?

やる~~~~!!!

頑張って!

Scale Half Tone UP

C Δ 7 D $\flat\Delta$ 7 D Δ 7 E $\flat\Delta$ 7 E Δ 7

F Δ 7 F $\sharp\Delta$ 7 G Δ 7 A $\flat\Delta$ 7

A Δ 7 B $\flat\Delta$ 7 B Δ 7 C Δ 7

D $\flat\Delta$ 7 D Δ 7 E $\flat\Delta$ 7 E Δ 7

F Δ 7 F $\sharp\Delta$ 7

Fill

F $\sharp$ 7 F7 E7 E $\flat$ 7 D7

D $\flat$ 7 C7 B7 B $\flat$ 7

A7 A $\flat$ 7 G7 F $\sharp$ 7

F7 E7 E $\flat$ 7 D7

D $\flat$ 7 C7 D $\flat$ 7 C7

B7 B $\flat$ 7

CD-Any Key Advance-2

- 別表2 -

Scale Half Tone UP

その他の練習例

②

C Δ 7 D $\flat$ Δ 7 D Δ 7 E $\flat$ Δ 7 E Δ 7

F $\sharp$ 7 F7 E7 E $\flat$ 7 D7

③

C Δ 7 D $\flat$ Δ 7 D Δ 7 E $\flat$ Δ 7

F $\sharp$ 7 F7 E7 E $\flat$ 7

④

C Δ 7 D $\flat$ Δ 7 D Δ 7 E $\flat$ Δ 7

F $\sharp$ 7 F7 E7 E $\flat$ 7

⑤

C Δ 7 D $\flat$ Δ 7 D Δ 7 E $\flat$ Δ 7

F $\sharp$ 7 F7 E7 E $\flat$ 7

⑥

C Δ 7 D $\flat$ Δ 7 D Δ 7 E $\flat$ Δ 7

F $\sharp$ 7 F7 E7 E $\flat$ 7

⑦

C Δ 7 D $\flat$ Δ 7 D Δ 7 E $\flat$ Δ 7

F $\sharp$ 7 F7 E7 E $\flat$ 7

SCALE HALF TONE UP 2BARS CHANGE

Handwritten musical notation for a scale exercise, showing a sequence of chords and bar numbers.

Chords and Bar Numbers:

- Bar 1: C Δ 7
- Bar 2: D $\flat$ Δ 7
- Bar 3: D Δ 7
- Bar 4: E $\flat$ Δ 7
- Bar 5: E Δ 7
- Bar 6: F Δ 7
- Bar 7: F $\sharp$ Δ 7
- Bar 8: G Δ 7
- Bar 9: A $\flat$ Δ 7
- Bar 10: A Δ 7
- Bar 11: B $\flat$ Δ 7
- Bar 12: B Δ 7
- Bar 13: C Δ 7
- Bar 14: D $\flat$ Δ 7
- Bar 15: D Δ 7
- Bar 16: E $\flat$ Δ 7
- Bar 17: E Δ 7
- Bar 18: F Δ 7

Handwritten musical notation for a scale exercise, showing a sequence of chords and bar numbers.

SCALE HALF TONE UP 2BARS CHANGE 練習例

① まずは毎度おなじみスケール練習から！

The musical score consists of ten staves of music, each containing two measures of a scale. The scales are written in treble clef with a 7/8 time signature. The notes are eighth notes. The key signatures and scale directions are indicated by accidentals and the $\Delta 7$ symbol.

- Staff 1: $C \Delta 7$ (C major, ascending) and $D \flat \Delta 7$ (D-flat major, descending)
- Staff 2: $D \Delta 7$ (D major, ascending) and $E \flat \Delta 7$ (E-flat major, descending)
- Staff 3: $E \Delta 7$ (E major, ascending) and $F \Delta 7$ (F major, descending)
- Staff 4: $F \sharp \Delta 7$ (F-sharp major, ascending) and $G \Delta 7$ (G major, descending)
- Staff 5: $A \flat \Delta 7$ (A-flat major, ascending) and $A \Delta 7$ (A major, descending)
- Staff 6: $B \flat \Delta 7$ (B-flat major, ascending) and $B \Delta 7$ (B major, descending)
- Staff 7: $C \Delta 7$ (C major, ascending) and $D \flat \Delta 7$ (D-flat major, descending)
- Staff 8: $D \Delta 7$ (D major, ascending) and $E \flat \Delta 7$ (E-flat major, descending)
- Staff 9: $E \Delta 7$ (E major, ascending) and $F \Delta 7$ (F major, descending)
- Staff 10: $F \Delta 7$ (F major, ascending) and a final whole note chord (F major).

② ルートの周りをこねくり回す練習Part 1

1-3-5-8-7-8-9-7-8-7-6-5-4-3-2-1

This musical score is a piano exercise in C major, featuring a sequence of 15 chords: CΔ7, DΔ7, EΔ7, FΔ7, GΔ7, AΔ7, BΔ7, CΔ7, DΔ7, EΔ7, FΔ7, GΔ7, AΔ7, BΔ7, and CΔ7. The melody is composed of eighth and sixteenth notes, with some measures containing triplets. The score is written on ten staves, with the first staff using a treble clef and the subsequent staves using a bass clef. The key signature is one sharp (F#), indicating C major. The exercise focuses on the root movement of the chords, which follows the scale 1-3-5-8-7-8-9-7-8-7-6-5-4-3-2-1.

③ ルートの周りをこねくり回す練習Part2。バップの王道
1-3-5-8-7-9- $\flat$ 9-7-8-7- $\flat$ 7-6-5-3-2-1

Chord symbols: $C\Delta7$, $D\Delta7$, $E\Delta7$, $F\Delta7$, $G\Delta7$, $A\Delta7$, $B\Delta7$, $C\Delta7$, $D\Delta7$, $E\Delta7$.

④ ペンタトニックの応用。ウエスト・コースト風
1-2- $\flat$ 3-3-5-6-8-6- $\sharp$ 5-5-3- $\flat$ 3-2-1

Chord symbols and staff details:

- Staff 1: $\text{C}\Delta 7$ (first measure), $\text{D}\flat\Delta 7$ (second measure)
- Staff 2: $\text{D}\Delta 7$ (first measure), $\text{E}\flat\Delta 7$ (second measure)
- Staff 3: $\text{E}\Delta 7$ (first measure), $\text{F}\Delta 7$ (second measure)
- Staff 4: $\text{F}\sharp\Delta 7$ (first measure), $\text{G}\Delta 7$ (second measure)
- Staff 5: $\text{A}\flat\Delta 7$ (first measure), $\text{A}\Delta 7$ (second measure)
- Staff 6: $\text{B}\flat\Delta 7$ (first measure), $\text{B}\Delta 7$ (second measure)
- Staff 7: $\text{C}\Delta 7$ (first measure), $\text{D}\flat\Delta 7$ (second measure)
- Staff 8: $\text{D}\Delta 7$ (first measure), $\text{E}\flat\Delta 7$ (second measure)
- Staff 9: $\text{E}\Delta 7$ (first measure), $\text{F}\Delta 7$ (second measure)

⑤ from おなじみ In The Mood

The musical score consists of ten staves, each containing a melodic line and a series of chords. The chords are labeled as follows:

- Staff 1: $C\Delta7$, $B\Delta7$
- Staff 2: $D\Delta7$, $E\Delta7$
- Staff 3: $E\Delta7$, $F\Delta7$
- Staff 4: $F\Delta7$, $G\Delta7$
- Staff 5: $A\Delta7$, $A\Delta7$
- Staff 6: $B\Delta7$, $B\Delta7$
- Staff 7: $C\Delta7$, $B\Delta7$
- Staff 8: $D\Delta7$, $E\Delta7$
- Staff 9: $E\Delta7$, $F\Delta7$
- Staff 10: $F\Delta7$, $G\Delta7$

The melody is written in a single line on a five-line staff, using a treble clef. The notes are primarily eighth and quarter notes, with some rests and ties. The chords are written above the staff, indicating the harmonic structure of the piece.

⑥ 3和音を半音下からアプローチする練習

⑥ 3和音を半音下からアプローチする練習

この練習は、12の異なる3和音（トリアド）を、半音下から半音上まで連続的にアプローチする練習です。各和音は、その名前が記された音符（C, Db, D, Eb, E, F, F#, G, Ab, A, Bb, B）の上に、Δ7の記号が付いています。音楽記法は、4/4拍子、トレブルclef、8分音符の連続した動きで示されています。

⑦ 3和音をスケール上の1音上からアプローチする練習

The following table lists the 7th chords for each exercise shown in the score:

Exercise	Chord
1	C Δ 7
2	D $\flat$ Δ 7
3	D Δ 7
4	E $\flat$ Δ 7
5	E Δ 7
6	F Δ 7
7	F $\sharp$ Δ 7
8	G Δ 7
9	A $\flat$ Δ 7
10	A Δ 7
11	B $\flat$ Δ 7
12	B Δ 7
13	C Δ 7
14	D $\flat$ Δ 7
15	D Δ 7
16	E $\flat$ Δ 7
17	E Δ 7
18	F Δ 7
19	Whole Rest

⑧ ⑥と⑦のミックス

C#7 D#7 E#7 F#7 G#7 A#7 B#7 C#7 D#7 E#7 F#7 G#7

⑨ ⑧の応用フレーズ Part1

The musical score consists of 10 staves, each representing a different chord and its corresponding melodic application. The chords are labeled above the staves:

- Staff 1: $C\Delta7$
- Staff 2: $D\Delta7$
- Staff 3: $E\Delta7$
- Staff 4: $F\Delta7$
- Staff 5: $F\sharp\Delta7$
- Staff 6: $G\Delta7$
- Staff 7: $A\flat\Delta7$
- Staff 8: $A\Delta7$
- Staff 9: $B\flat\Delta7$
- Staff 10: $B\Delta7$

The melody for each staff is written in a single line, showing the progression of notes and rests for that specific chord. The notation includes various accidentals (sharps, flats, naturals) and rests to indicate the correct pitch and timing for each note.

⑩ ⑧の応用フレーズ Part2

The musical score consists of 10 staves, each containing a 4-measure phrase. The chords and accidentals for each staff are as follows:

- Staff 1: $C\Delta^7$ (measures 1-2), $D\flat\Delta^7$ (measures 3-4)
- Staff 2: $D\Delta^7$ (measures 1-2), $E\flat\Delta^7$ (measures 3-4)
- Staff 3: $E\Delta^7$ (measures 1-2), $F\Delta^7$ (measures 3-4)
- Staff 4: $F\sharp\Delta^7$ (measures 1-2), $G\Delta^7$ (measures 3-4)
- Staff 5: $A\flat\Delta^7$ (measures 1-2), $A\Delta^7$ (measures 3-4)
- Staff 6: $B\flat\Delta^7$ (measures 1-2), $B\Delta^7$ (measures 3-4)
- Staff 7: $C\Delta^7$ (measures 1-2), $D\flat\Delta^7$ (measures 3-4)
- Staff 8: $D\Delta^7$ (measures 1-2), $E\flat\Delta^7$ (measures 3-4)
- Staff 9: $E\Delta^7$ (measures 1-2), $F\Delta^7$ (measures 3-4)

Cicle of 5th Exercise

◎コード(フレーズ)が4度(5度)ずつずれて行くと、13番目には元の音(フレーズ)に戻って来てしまう、という音楽の仕組みを音と指で覚えてしまおう!という練習です。

◎1つ1つの練習を、60(4分音符)から始めて、200位まで出来るようになったら次に進んでいくようにして下さい。全部出来たら今度は倍速で、やれる所まで頑張りましょう!!

◎2~3オクターブでやれるフレーズは練習中に必ず取り入れてください!
譜面どおりのありきたりの練習ではダメです!

◎8分単位のリズムアタック(ジャズ編初級 別表5~9)を用い、
いろんなリズムパターンで練習してください!!

Ex.1 まずは、ルートの並びを覚えよう

C F B $\flat$ E $\flat$

A $\flat$ D $\flat$ F $\sharp$ B

E A D G

順番に、むちゃくちゃ早く吹けるようにして下さい!!

Ex.2 I - III / I - V

C F B $\flat$ E $\flat$

A $\flat$ D $\flat$ F $\sharp$ B

E A D G

ベースの2Beat Pattern。I - V / I - IIIにもチャレンジしてみましょう!

Ex.3 I - III

C F B $\flat$ E $\flat$

A $\flat$ D $\flat$ F $\sharp$ B

E A D G

4度は長3度の半音上、というのを意識して練習してください。慣れたらⅢ - Iにもチャレンジ！

Ex.4 I - II - III

C F B $\flat$ E $\flat$

A $\flat$ D $\flat$ F $\sharp$ B

E A D G

慣れたらⅢ - II - Iにもチャレンジしてください！

Ex.5 I - III - V

C F B $\flat$ E $\flat$

A $\flat$ D $\flat$ F $\sharp$ B

E A D G

慣れたらⅤ - III - Iにもチャレンジしてください！

Ex.6 I - II - III - V

C F B^b E^b

A^b D^b F[#] B

E A D G

慣れたら V - III - II - I にもチャレンジしてください！

Ex.7 I - III - V - V^b

C F B^b E^b

A^b D^b F[#] B

E A D G

4 Beatのベースライン。他に I - II - III^b - III、I - II^b - II - IIIも練習してみてください！

Ex.8 I - III - V - VI

C F B^b E^b

A^b D^b F[#] B

E A D G

サウンドに彩りを与える6thの練習。逆向きの VI - V - III - I は難しいけど、頑張って!!

Ex.9 V-Ⅱ[#]-Ⅲ-I

C F B^b E^b

A^b D^b F[#] B

E A D G

メジャー3rdにマイナー3rdを加え、彩りのあるサウンドへ！

Ex.10 V-VII-I

C7 F7 B^b7 E^b7

A^b7 D^b7 F[#]7 B7

E7 A7 D7 G7

いよいよドミナント7thの登場。ルートと7thの関係を意識しながら練習しよう！

Ex.11 Ⅲ-V-I-VII

C7 F7 B^b7 E^b7

A^b7 D^b7 F[#]7 B7

E7 A7 D7 G7

Ⅲ-VⅦ使いの有名フレーズ。手癖にして♪=250ぐらいまで吹けるようにしとくと、いいでしょう！

ここからは、今までやってきたフレーズをより実践的に磨いていく練習です。
1小節ごとよく吟味し、サイコーの音で吹ききれよう練習しましょう！

EX.12 ペンタトニック

EX.13 ペンタ+m3(ブルーノートスケール 3rdアプローチ)

EX.14 ペンタ+#5

EX.15 (～18ブルーノートスケール

EX.15 (～18ブルーノートスケール

Measures 1-12:

- Measure 1: C (blue), F (natural)
- Measure 2: B $\flat$ (blue), E $\flat$ (natural)
- Measure 3: A $\flat$ (blue), G (natural)
- Measure 4: F $\sharp$ (blue), D $\flat$ (natural)
- Measure 5: E (blue), C (natural)
- Measure 6: D $\flat$ (blue), B (natural)
- Measure 7: C (blue), A (natural)
- Measure 8: B $\flat$ (blue), G (natural)
- Measure 9: A $\flat$ (blue), F $\sharp$ (natural)
- Measure 10: G (blue), E $\flat$ (natural)
- Measure 11: F $\sharp$ (blue), D $\flat$ (natural)
- Measure 12: E (blue), C (natural)

EX.16

EX.16

Measures 13-24:

- Measure 13: C (blue), F (natural)
- Measure 14: B $\flat$ (blue), E $\flat$ (natural)
- Measure 15: A $\flat$ (blue), G (natural)
- Measure 16: F $\sharp$ (blue), D $\flat$ (natural)
- Measure 17: E (blue), C (natural)
- Measure 18: D $\flat$ (blue), B (natural)
- Measure 19: C (blue), A (natural)
- Measure 20: B $\flat$ (blue), G (natural)
- Measure 21: A $\flat$ (blue), F $\sharp$ (natural)
- Measure 22: G (blue), E $\flat$ (natural)
- Measure 23: F $\sharp$ (blue), D $\flat$ (natural)
- Measure 24: E (blue), C (natural)

EX.17

EX.17

Measures 25-36:

- Measure 25: C (blue), F (natural)
- Measure 26: B $\flat$ (blue), E $\flat$ (natural)
- Measure 27: A $\flat$ (blue), G (natural)
- Measure 28: F $\sharp$ (blue), D $\flat$ (natural)
- Measure 29: E (blue), C (natural)
- Measure 30: D $\flat$ (blue), B (natural)
- Measure 31: C (blue), A (natural)
- Measure 32: B $\flat$ (blue), G (natural)
- Measure 33: A $\flat$ (blue), F $\sharp$ (natural)
- Measure 34: G (blue), E $\flat$ (natural)
- Measure 35: F $\sharp$ (blue), D $\flat$ (natural)
- Measure 36: E (blue), C (natural)

EX.18

EX.18 is a 12-measure exercise in treble clef. The notes are: C, D, E, F, G, A, B $\flat$, C, D, E $\flat$, F, G. The notes are grouped into four measures of three notes each, with a repeat sign at the beginning and end.

EX.19 ペンタトニック

EX.19 is a 12-measure exercise in treble clef. The notes are: C, D, E, F, G, A, B $\flat$, C, D, E $\flat$, F, G. The notes are grouped into four measures of three notes each, with a repeat sign at the beginning and end.

EX.20 コードトーン、半音アプローチ

EX.20 is a 12-measure exercise in treble clef. The notes are: C, D, E, F, G, A, B $\flat$, C, D, E $\flat$, F, G. The notes are grouped into four measures of three notes each, with a repeat sign at the beginning and end.

EX.21 ペンタ+m3(ブルーノートスケール 3rdアプローチ)

EX.21 consists of three staves of music, each containing four measures. The key signatures for the measures are: C, F, B $\flat$, E $\flat$, A $\flat$, D $\flat$, F $\sharp$, B, E, A, D, G. Each measure begins with a triplet of eighth notes, followed by a single eighth note and a quarter note. The triplet patterns are: C (C4, D4, E4), F (F4, G4, A4), B $\flat$ (B $\flat$ 4, C5, D5), E $\flat$ (E $\flat$ 4, F4, G4), A $\flat$ (A $\flat$ 4, B $\flat$ 4, C5), D $\flat$ (D $\flat$ 4, E $\flat$ 4, F4), F $\sharp$ (F $\sharp$ 4, G $\sharp$ 4, A4), B (B4, C5, D5), E (E4, F4, G4), A (A4, B4, C5), D (D4, E4, F4), G (G4, A4, B4).

EX.22 マイナーペンタ+M3

EX.22 consists of three staves of music, each containing four measures. The key signatures for the measures are: C, F, B $\flat$, E $\flat$, A $\flat$, D $\flat$, F $\sharp$, B, E, A, D, G. Each measure begins with a triplet of eighth notes, followed by a single eighth note and a quarter note. The triplet patterns are: C (C4, D4, E4), F (F4, G4, A4), B $\flat$ (B $\flat$ 4, C5, D5), E $\flat$ (E $\flat$ 4, F4, G4), A $\flat$ (A $\flat$ 4, B $\flat$ 4, C5), D $\flat$ (D $\flat$ 4, E $\flat$ 4, F4), F $\sharp$ (F $\sharp$ 4, G $\sharp$ 4, A4), B (B4, C5, D5), E (E4, F4, G4), A (A4, B4, C5), D (D4, E4, F4), G (G4, A4, B4).

EX.23 ペンタトニック

EX.23 consists of three staves of music, each containing four measures. The key signatures for the measures are: C, F, B $\flat$, E $\flat$, A $\flat$, D $\flat$, F $\sharp$, B, E, A, D, G. Each measure begins with a triplet of eighth notes, followed by a single eighth note and a quarter note. The triplet patterns are: C (C4, D4, E4), F (F4, G4, A4), B $\flat$ (B $\flat$ 4, C5, D5), E $\flat$ (E $\flat$ 4, F4, G4), A $\flat$ (A $\flat$ 4, B $\flat$ 4, C5), D $\flat$ (D $\flat$ 4, E $\flat$ 4, F4), F $\sharp$ (F $\sharp$ 4, G $\sharp$ 4, A4), B (B4, C5, D5), E (E4, F4, G4), A (A4, B4, C5), D (D4, E4, F4), G (G4, A4, B4).

♩=90-160

指を正確に素早く動かす練習 Select 120

ゆっくり、いい音で、確実に、そして徐々にテンポアップしていきましょう!!
 160で演奏できるまでには相当な年月を要しますが、めげずに頑張りましょう!!

C^Δ C^{Δ7} C7 C6 C9 C^{SUS4} C7^{SUS4} ETC. IONIAN MIXOLYDIAN



C- C-7 C-11 ETC. AEOLIAN C-6 DORIAN



C- C-7 C-11 ETC. PHRYGIAN



C--- PHRYGIAN FLAT 4



C7(b9) C7 ETC. H.MIN.P.5



C^Δ C^{Δ7} C7 C7(#11) C7(b5) C9 C^{Δ7}(#11) ETC. LYDIAN



C[∅] ETC. LOCRIAN



C[∅] C7 C-7 C7(#11) C7(#9) ETC. LOCRIAN #2

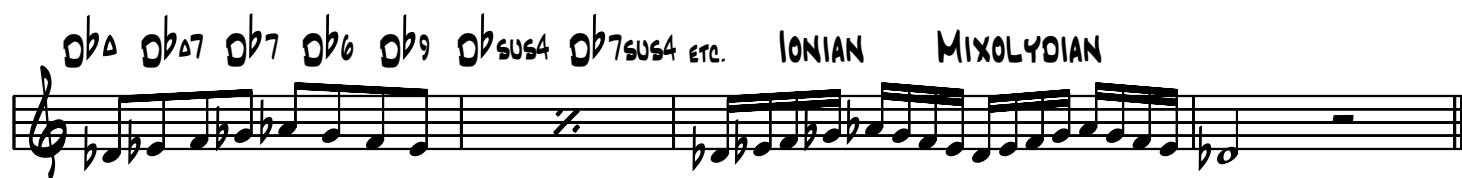


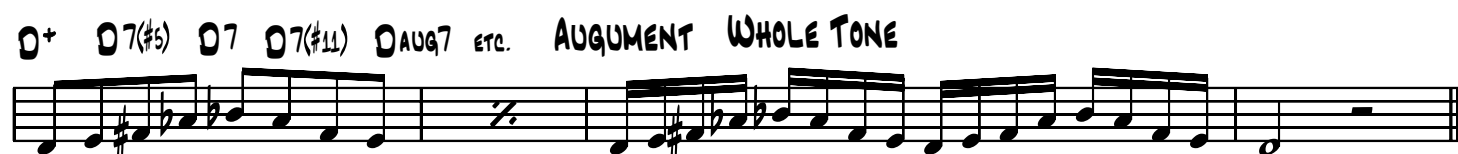
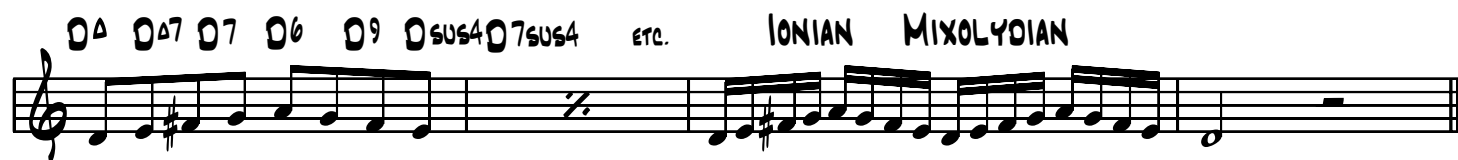
C[°] C[∅] C7 C7(b9) ETC. DIMINISH ALTERED

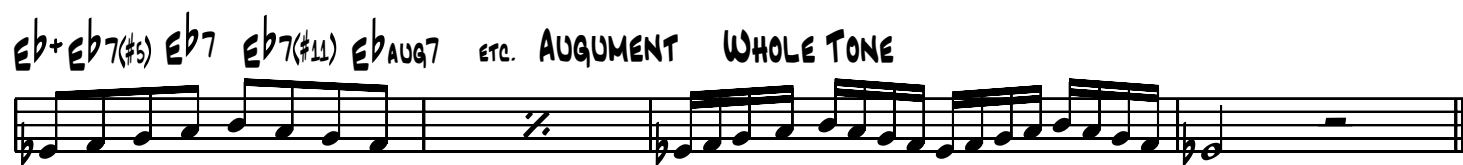
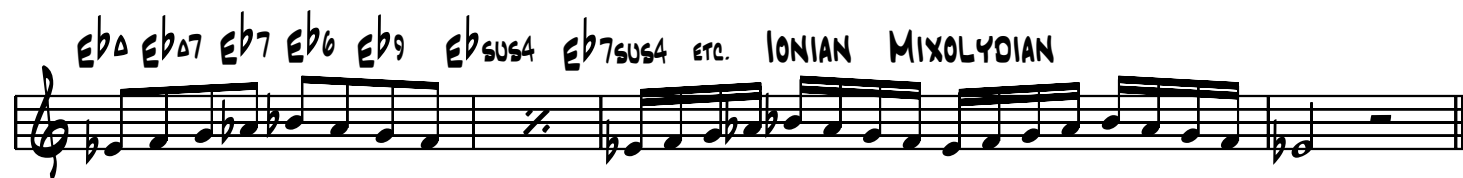


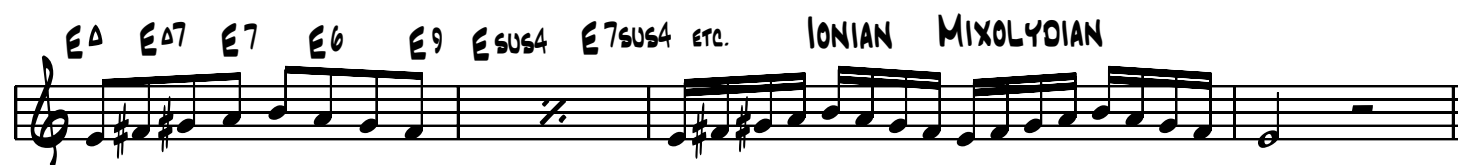
C⁺ C7(#5) C7 C7(#11) C^{AUG7} ETC. AUGMENT WHOLE TONE

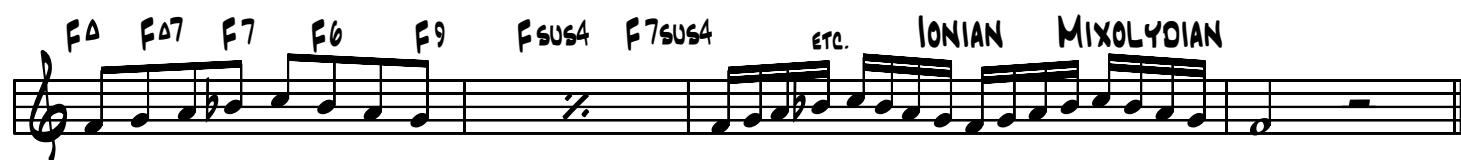


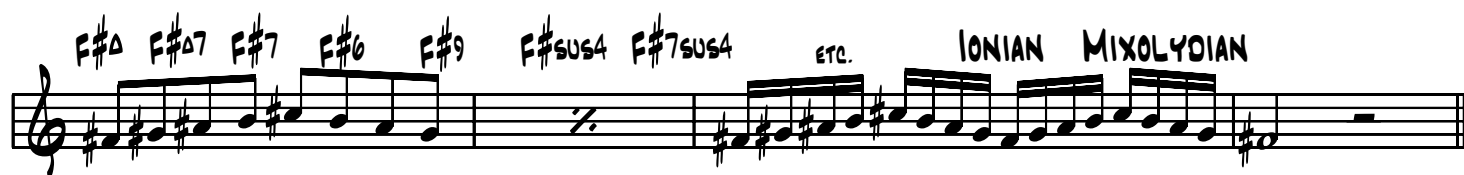












G^{Δ} $G^{\Delta 7}$ G^7 G^6 G^9 G^{sus4} G^{7sus4} ETC. IONIAN MIXOLYDIAN

G^- G^{-7} G^{-11} ETC. AEOLIAN G^6 DORIAN

G^- G^{-7} G^{-11} ETC. PHRYGIAN

G^{---} PHRYGIAN FLAT 4

$G^7(b9)$ G^7 ETC. H.MIN.P.5

G^{Δ} $G^{\Delta 7}$ G^7 $G^7(\#11)$ $G^7(b5)$ G^9 $G^{\Delta 7}(\#11)$ ETC. LYDIAN

G^{ϕ} ETC. LOCRIAN

G^{ϕ} G^7 G^{-7} $G^7(\#11)$ $G^7(\#9)$ ETC. LOCRIAN #2

G° G^{ϕ} G^7 $G^7(b9)$ ETC. DIMINISH ALTERED

G^+ $G^7(\#5)$ G^7 $G^7(\#11)$ G^{aug7} ETC. AUGMENT WHOLE TONE









ここまでやれたら1オクターブ上げて最初から(鬼)!!

指慣らし MAJOR

Repeat 3 times

51

56

指慣らし minor

Repeat 3 times

46

51

56